I-2

建築家による日本的表現の追求に関する研究
—日本的表現をめぐる流れとその変化について—
Research on the pursuit of Japanese expression by architects
About the flow of Japanese expressions and their changes

○荒優花[1]，　田所辰之助[2]
○Yuka Ara[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

Before the war, he called it " Japanese style" and tried to express Japan in an architectural style. On the other hand, after the war, he tries to express Japan by the abstract things of space and tradition. From a series of flows surrounding Japanese expressions from prewar to postwar, we will consider the Japanese expressions given by modernism and the changes in their way of thinking.

１．研究背景と目的

建築における日本的表現というのは西洋建築が日本にもたらされて以来,常に意識しなくてはならなかった.特に大正・昭和戦前期は活発的に議論された時代であった.戦前の特徴としては「国民様式」と呼び,新たに様式を創造することで日本を表現しようとした.戦後になるとモダニズムが主流になり,様式による表現は影をひそめる.そうした変化を踏まえ、1945 年以降の日本的な表現に関する動きが戦前とどのように異なるかを考察することを目的とする.

２．研究方法

戦後の日本的な表現をめぐる動きは 1945 年から 1970 年頃までを対象とし,その期間に発表された論文・建築作品を中心に整理・分析を行う．その後,戦前の様式論争の論点や結論,建築作品と比較し相違点を明らかにする.

３．戦前の日本的表現

３－１.様式の創造

明治末期,日本人建築家たちによってはじめて建築様式について議論された討論会がある．1910 年に開かれた討論会は「我国将来の建築様式を如何にすべきや」と題された.この討論会は議院建築を西洋の建築様式を基に設計しようとしていたところ,辰野金吾,塚本靖,伊東忠太が異議を唱えたところから始まっていることも新しい様式の創造が目標になっていた要因のひとつと考えられる.

明治の時点では議論で終わってしまったが,大正時代入ると討論会で議論されていたものが明治神宮宝物殿の設計競技で様々な案として提出された.最終的には大江新太郎により,鉄筋コンクリート造によって日本建築の意匠を用いた日本趣味建築が提案された.

３－２．空間への意識

戦前期は歴史主義が主流であったため,日本的な表現も様式に現れることが多かった.その中で坂倉準三の「パリ万国博覧会日本館」（1937）と浜口隆一の「日本国民建築様式の問題—建築学の立場から—」（1943）は異なる傾向を示す.

坂倉のパリ万国博覧会は鉄骨による木造の柱表現と流動的空間,なまこ壁風のデザインにより空間とデザインによって日本を表現した.当時主流ではなかったが,モダニズムと日本建築の融合を試みたモダニストたちもおり,坂倉の日本館はそうした昭和戦前期のモダニズムによる日本的表現の完成形とも考えることができる.

図 1 パリ万国博覧会日本館(外観)　図 2 パリ万国博覧会日本館(内観)

浜口が戦時下で発表した国民建築様式に関する論文では建築の空間について明確に触れられている.この論文では建築学という視点,建築を知る立場に立つことで,西洋と日本の建築に対する考えの違いを述べている.西洋は建築を作る際に物質的・構成的であることが重要視されるのに対し,日本では行為的・空間的なものを重要視するところに西洋と日本の違いがあるとし,空間の中に日本を見出そうとしている.この論文はもともと在盤谷日本文化会館の設計競技の結果を受けて書かれている.前川國男と丹下健三の案を比較し,伸びやかな前川案,荘重な丹下案と印象は異なるものの,根柢的な傾向は一致していると浜口は述べている.

４．戦後の日本的表現

４－１．住宅と寝殿造

戦前に比べ戦後には日本的な表現を住宅建築でも見かけるようになる.その中でも特にワンルームを区切って使う平面構成が 1950 年代頃から表れるようになる.1950 年代初頭には「最小限」であること,それ以降は「ローコスト」であることが住宅には求められたことがワンルームタイプの住宅の登場を後押ししたと考えられる.

寝殿造を基調とした住宅の代表として 1951 年に発表された清家清の森博士の家が挙げられる.浴室,トイレ,納戸以外の居住空間は一つの空間とし,用途に応じて建具で分割して使える構成をしている.翌年に発表された竹田教授の家も平面は森博士の家同様のプランで構成されているが,この住宅の最も印象的なのは縁側中央部になる棟持柱である.棟持柱をシンメトリーな立面の中心に持ってくることでこの住宅に中心性が生まれ,行為的空間性にも広がりが生まれる.丹下健三をはじめ,篠原一男,増沢洵など多くの建築家が類似した平面構成を持つ住宅を設計している.

図 3 森博士の家(外観)

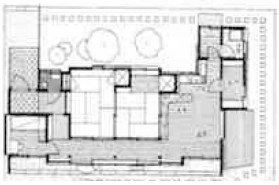

図 4 森博士の家(平面図)

４－２．伝統と建築

1950 年代になると近代建築と伝統の関係性について論じられるようになる.その中でも 1955 年から 56 年に川添登と丹下健三を中心に近代建築と伝統の関係性について議論されたものが伝統論争と呼ばれる.仕掛け人である川添は伝統論争は建築界の内外で広く国民的建築が求められた時代,本格的な建築の設計の機会がほとんど与えられなかった中堅以下の建築家たちがため込んだ建築への熱意を利用し,建築の未来を切り開こうとした.

伝統論争以前では 1952 年に稲垣栄三が『建築の近代主義的傾向』にて戦前の日本趣味の問題に触れながら,今後の建築の在り方について問いている.日本的な表現の追求が盛んになり始めていたから稲垣のような指摘も必要であった.翌年の 1953 年には西山夘三が『住宅計画における民族的伝統と国民的課題』にて,日本的なものを住宅に求め,住宅の様式を発展させることが重要と主張した.この頃から伝統という抽象的な概念の中に日本を見出そうとしている.

４－３．民家への着目

数寄屋を住宅建築へ取り入れることは戦前からよくおこなわれていたのに対し,民家を住宅建築へ取り入れることはあまり行われていなかった.早いもので堀口捨己が 1926 年に紫烟荘でオランダの民家とモダニズムを組み合わせている.それ以降は主に戦時下において民家をと入りれる建築家が現れる.

戦時下に作られた民家を取り入れた建築としては吉田五十八の杵屋別邸や白井晟一の歓帰荘などがあげられる.

４－４．海外の日本建築

1953 年,ニューヨーク近代美術館に書院造が展示された.書院造を設計するにあたり,「17 世紀における教養のある武士の住宅を理想の対象として二条城書院と桂離宮の間に存在するもの」を表現する,というコンセプトが美術館側によって決められた.この書院造の設計を任されたのは,日本建築に造詣の深い吉村順三であった.こうした日本建築がアメリカを中心とした海外に積極的に作られるようになり,海外に向けての日本的な表現も模索され始めたのは戦後の特徴のひとつでもある.

５．まとめ

戦前の日本的な表現の殆どは様式による表現であり,その様式も過去からの借り物であった.戦後はモダニズムが主流になり,建築が様式で考えられなくなると,空間であったり,伝統といった抽象的なものから日本を抽出し,建築に落とし込むように変化している.同じように日本を表現することを模索しているが,その表現方法は全く異なり,概念として日本を見ることで抽象的に日本を表現しようとしている.

６．参考文献

[1]『新建築 1995 12 月臨時増刊 創刊 70 周年記念号 現代建築の軌跡 1925-1995「新建築」に見る建築と日本の近代』新建築社,1995 年,pp.172-215 [2]『建築文化』彰国社,1977 年 10 月 [3]『新建築 1975 12 月臨時増刊 新建築史 50 年に見る建築昭和史』新建築社,1975 年 12 月 [4]『新建築 1978 11 月臨時増刊 日本の現代建築』新建築社,1978 年 11 月

７．図版出典

[図 1,2]松隈洋『建築の前夜 前川國男論』みすず書房、2016 年 p.146 [図 3,4]『新建築 臨時増刊号』新建築社,1995 年,p173